2018（平成 30）年 2 月 24 日

西南学院大学文学研究科博士学位申請論文審査報告書

主査　川瀬 義清
副査　D.L. Olson
副査　土屋 慶子

学位申請者　冬野 美晴

論 文 題 目　A Corpus-Based Evidential Approach to English Education for Japanese Learners: Examples of Written Grammar and Spoken Communication

審査の経過

冬野美晴氏の学位請求論文は，2017 年 8 月 25 日に事前審査論文が提出され，学内の事前審査委員会の指導に基づくリライトを経て，2017 年 12 月 20 日に受理された。その後，外部審査委員を含む３名の審査委員による審査を経て，2018 年 2 月 20 日の最終試験（公開）をもって審査を終了した。

論文の概要

本論文は，５章で構成されており，日本における学校英語教育の問題点について，コーパスデータによるエビデンスを用いることで，どのように改善できるかという観点から論じたものである。

第１章では，英語教育の変遷を概観し，近年のコーパスの発展が英語教育にどの様な影響を及ぼしているかを論じつつ，研究の背景と目的を述べている。

第２章では，コーパス言語学の発展により，英語教育にコーパスデータに基づく教育という新たな観点が導入され，特にヨーロッパを中心とし，マルチモーダルコーパスに基づく教育が取り入れられるようになったことが論じられている。章の後半では，続く章の研究の出発点として，海外勤務経験者に対するニーズ調査を行い，その分析結果から日本の英語教育に不足している点を明らかにしている。

第３章は，日本の英語教育で用いられている用例の問題について心理動詞受動文を取り上げ，日本人英語学習者コーパスの用例と British National Corpus(BNC)の用例を比較検討している。日本の英語教育の現場で心理動詞受動文を教えるときには，動詞と

前置詞の組み合わせを熟語的に教えることが多いが，BNC では通常の受動文と同様に前置詞として by が用いられた用例が数多くあることを指摘し，コレスポンデンス分析により，日本人英語学習者の用例と BNC の用例の違いを明らかにしている。また，これに基づき適切な前置詞選択の学習のための教材を提唱している。

本章の後半では，BNC のサブコーパスを用いて，話し言葉と書き言葉の心理動詞受動文の用法の分析を行っている。話し言葉では，書き言葉にくらべ心理動詞で文が終わる用例が多くあり，談話における話者のコメント機能を果たしていると論じている。

第４章は，マルチモーダルコーパスを用いたスピーチの分析である。第２章で行ったニーズ調査から明らかになった日本の英語教育におけるスピーチ教育の不足に焦点を当て，スピーチを定量的に分析することにより，スピーチ指導に必要な指標を明らかにしている。

まず，日本人英語学習者のスピーチを基に，動画，音声，スクリプト，パフォーマンスの評価データからなるマルチモーダルコーパスを構築し，音声ポーズとアイコンタクトを取り上げ，これらの要素が評価にどの様な影響を与えているかを調査している。その結果，不適切な音声ポーズが多いほど評価が低くなり，また，評価の高いスピーチでは，アイコンタクトの顔の振り幅が大きく，およそ６秒に１回程度の割合でアイコンタクトを行っていることが分かった。

次に，重回帰分析を用いてパフォーマンスに最も大きな影響を与えている要素を調べ，不適切な音声ポーズの割合（incomplete unit ratio）のみが有意な変数であることを明らかにする。

第５章では，論文全体のまとめと今後の展望を論じている。今後の展望として，本研究で得られた知見を基に教材開発プロジェクトが進行中であることを述べている。

論文の評価

冬野氏は，日本の英語教育における問題点として，日本の英語教育現場で用いられている用例と英語ネイティブスピーカーが用いている実際の用例とのずれ，コミュニカティブなアプローチが提唱されているにも関わらず話し言葉の用例に基づく指導が不足していること，およびスピーチ教育の不足をあげ，これらの問題についてデータに基づき実証的に明らかにしている。さらに，これに対する解決策として，コーパスを英語教育に利用することにより改善が可能であることを示している。

第１章では，コーパス研究とその英語教育への応用を概観し，第２章では，海外勤務経験者に対するニーズ調査によって日本の英語教育の弱点を明らかにした。これらの背

景を基に，第３章，第４章の分析へとつながっていく。

第３章では，心理動詞受動文を取り上げ，心理動詞と前置詞の組み合わせを熟語的に扱ってきた日本の英語教育に対し，BNC のデータから様々な組み合わせが可能なことを明らかにし，コレスポンデンス分析を用いて分かりやすく提示している。また，コーパスを用いた研究はこれまでにも数多くあるが，これまであまり注目されることのなかった，話し言葉と書き言葉についてその用例の特徴に違いがあることを明らかにした点は，新たな着眼点として評価できる。このような研究手法は，今回の心理動詞受動文の分析だけでなく，多くの文法事象に応用することが可能であり，日本の英語教育の改善につながる研究である。

この論文の一番の見どころはマルチモーダルコーパスを利用してスピーチを分析した第４章であろう。ここでは，動画・音声など複数のインプットデータから構成されるマルチモーダルコーパスの作成と分析を行い，習熟度の高い学習者の音声，動作上の特徴を定量化している。また，重回帰分析を用いることで，それらの特徴の中で特にどの要素が評価に影響を与えているか明らかにしている。これまで感覚的に指導されてきた，スピーチに必要な要素について，具体的な数値による指標を明らかにしたことは，教育現場におけるスピーチ指導に資するものである。

また，画像工学で用いられる２Ｄ動画に特徴点を設定してモーショントラックする方法によりスピーチ中の話者の顔向きを定量的かつ半自動的に推定することに成功しており，今後のマルチモーダルコーパス分析に寄与する結果を示している。音声データに関しても音声解析ソフトウェアを応用することによってポーズの自動抽出を行っており，こちらも同様に幅広いマルチモーダルコーパス分析に応用できると期待される。

今回，冬野氏がマルチモーダルコーパスを用いてスピーチを分析した手法は，単にスピーチの分析だけでなく，様々なコミュニケーションの場面に応用することが可能であり，幅広い発展性を持った研究である。

ここまで本論文の優れた点を見てきたが，気になる点が無いわけではない。第３章で心理動詞受動文について分析しているが，多くの文法事項の中からなぜ心理動詞受動文を取り上げたのか明らかでなく，若干唐突な印象をうける。分析自体に問題があるわけではないが，もう少し丁寧な説明が望まれる。

また，第４章のマルチモーダルコーパスを用いたスピーチ分析は，音声ポーズのパターンとアイコンタクトのパターンの分析にとどまっているが，音声の持つ音調や音質等にも広げることができればさらに有益な結果を得ることができるであろう。

いくつか改善すべき点はあるものの，冬野氏の論文は，研究の目的が明確で，全体の

構成，研究手法も優れており，データに裏付けられた説得力のある質の高い論文といえる。

以上，学位請求論文の内容，最終試験における応答などから総合的に判断した結果，審査委員全員一致で，この研究が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。